

子規とその妹

首藤 静夫

正岡子規は母と妹の律に看取られ、三十四歳の短い生涯を閉じた。結核菌が脊椎を冒す脊椎カリエスで、最期の三年間は殆ど仰臥のままだったという。日々襲う痛みに悲鳴を上げ、時に泣き叫ぶ子規を看護するのは骨が折れたことだろう。律は看護だけでなく、毎日のおさんどんを含む家事全般、さらに子規の原稿の浄書も手伝ったというから休む暇はなかっただろう。

子規と律は三つ違いだ。彼女は十五歳と十八歳の時に二度結婚し、いずれも一、二年で離婚している。二度目の時は子規が喀血し、その看護で実家に居ついたためであった。

子規は病床にありながらも俳句・短歌の革新や創作・執筆に励み、仲間を呼んでは盛んに議論したという。死の床にいながら書いた日記が有名な『墨汁一滴』『病状六尺』『仰臥漫録』である。前の二つは新聞日本に毎朝載った。最後の『仰臥漫録』は出版を考えない私的なもので、それだけに彼の感情が直截に描かれている。

ある日の一節。

律ハ理屈ツメノ女也 同感同情ノ無キ木石ノ如キ女也 義務的ニ病人ヲ介抱スルコトハスレトモ同情的ニ病人ヲ慰ムルコトナシ 病人ノ命ズルコトハ何ニテモスレトモ婉曲ニ諷シタルコトナドハ少シモ分ラズ 例ヘバ「団子ガ食ヒタイナ」ト病人ハ連呼スレトモ彼ハソレヲ聞キナガラ何トモ感ゼヌ也・・同情アル者ナラバ直ニ買フテ来テ食ハシムベシ（以下略）

離縁までして兄に尽くす律にすれば堪ったものではない。しかし、かくも悪し様に書かれた原因は団子にあるようだ。団子を買ってくれないので腹立ち紛れに書いたのだろう。毎日のように、あれが食べたいとだだをこねる子規の姿が見える。寝たきりでも食い意地が張っていた。友人や弟子が来ないと癪癪が起きたそうだ。彼らは必ず何か持参して来るはずだから。

悲惨な状態にありながら、それでも日記にある種の明るさや生命力が感じられるのが子規である。律は子規の死後、再婚はせず職業学校に学び和裁の教師となった。